



戦後、一旦帰村しましたが再度米軍基地トリイステーションとして接収されたため、北西側の現在地に区画区分を行い集団移転を余儀なくされました。一方、村内初の公共下水道の整備により、生活環境の改善ばかりでなく昔のような美しい海の回復も期待されています。楚辺の海に面するスビガネク（一部はトリイビーチ）のほか、ユーバンタは「世立ち」のハンタの意味であるといわ



アカヌク



艦砲ぬ喰え一残さー



夕焼けコンサート



楚辺

プロフィール

楚辺は、古い文献によれば「ねは村」「そへ村」と記される古村で、歌、三線の始祖である赤犬子を祀っています。『絵図郷村帳』（二六四六年）や『琉球国高究帳』（二七世紀中頃）では「そべ村」と見えます。また、近世の脇地頭に彌覇親雲上がおり（『琉球藩雜記』・「向姓伊志嶺家譜」など）、楚辺村と彌覇村が合併したとの伝承があります。『中山伝信録』（二七二二年）には読谷山間切のうちに楚辺村はなく「根波」とみえます。『琉球国由来記』（一七一三年）の拜所には楚辺ノ口の管轄する彌覇ノ嶽があり、ほかに楚辺巫火神・楚辺之殿があります。

古堅小学校の南側のウエンミ原は一五世紀の武將勝連の阿麻和利が戦死した地とされ、その墓がウエンミモ一の北側にあります。

赤犬子の宮

オモロ歌唱者アカインコ（赤犬子）終焉の地とされるアカヌク（赤犬子宮）では、旧暦九月二〇日にアカヌク一祭が開催されており、全県的に取り組まれている三月四日の「ゆかる日まざる日さんしんの日」には読谷村文化協会により三線演奏と琉球舞踊が奉納されます。

快活な社交性と赤犬子に象徴される唄と踊りの心は、積極的に伝統芸能を受け継ぐ活性化の原動力となり、国内外の交流へと発展させてきました。



2004年4月完成 楚辺公民館

れ、海の回復を契機にユーバンタの復活と居住環境の整備が図られています。

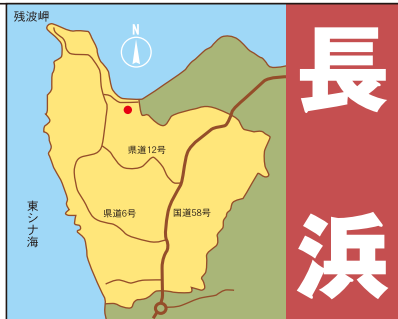
復活が待たれるユーバンタ

ユーバンタはスビガニクと並んで最も重要な海浜環境資源です。ユーバンタの復活による地域活性化の拠点機能に大きな期待が寄せられています。

ユーバンタの浜では会場に舞台を設けた夕焼けコンサートやタマンの稚魚の放流など、海浜の回復に向けた取り組みがなされています。



長浜棒



長浜

プロフィール

長浜集落は、長浜川河口南側の砂浜海岸低地に立地した古い集落です。『絵図郷村帳』（一六四六年）に「長浜村」とあり、『琉球国高究帳』（二七世紀中頃）には「長はま村」と見えます。天然の良港があったという入江にはトーシングムイ（唐船塙）の地名や唐船を係留したとされるトーシンシー（唐船岩）があり、読谷山花織や南蛮製の技法、民俗芸能のチクタルメー（作田米）やフェーヌシマ（南島踊）がこの港から伝わったといわれています。

長浜の高台にあった読谷陸軍補助施設は一九七四年に全面返還され、新興住宅地を形成しています。長浜川上流には九五年に完成した沖繩島最大の農業用ダムである「長浜ダム」があり、長浜川土地改良区等の圃場へ農業用水



2006年11月完成 長浜公民館



長浜の谷茶前 テービを持つ特徴があります



長浜大綱引き・護岸壁画



長浜ダム



トーシングムイ

を供給しています。

また、二〇〇六年十一月には、待望の長浜公民館が落成し、二一世紀のむらづくり・地域づくりの中心として活用されています。

海・川・山に囲まれた景観

他の集落とは崖地で隔てていることなどから独立的な集落形成をなしましたが、近年は、長浜ダムの建設や土地改良事業が完成し、さらに軍用地跡地の地籍明確化など周辺地域での開発整備が進んでいます。

長浜は、独特の伝統芸能を保存継承しており特にチヨンダラーやチクタルメー、長浜棒に特徴があります。

